

双曲割引と消費行動 アンケートデータを用いた実証分析^{*}

盛本 晶子[†]

要旨

この論文では、2005年から2007年の間に日本国内において大阪大学が実施した「暮らしの好みと満足度に関するアンケート」を用いて、双曲線型割引関数を持つ家計を抽出し、双曲線型割引関数を持つ家計とその他の家計の消費行動がいかに異なるかを検証した。具体的には、所得の大きさ・流動性資産残高・非流動性資産残高が消費量に与える影響を分析し、双曲線型割引関数を持った家計はその他の家計に比べて、所得の大きさが消費量に与える影響は大きく、非流動性資産残高が消費に与える影響は小さいということを明らかにした。この結果は、Laibson (1997) や Angeletos et al. (2001) の理論結果と整合的である。

JEL Classification: D12, D13, D91

Keywords: 双曲線型割引関数、限界消費性向

^{*}本稿の執筆にあたり、大阪大学経済学研究科の池田新介氏、筒井義郎氏、康明逸氏に有益なコメントを頂いたことに感謝する。本稿中のすべての誤りは筆者の責任である。

[†]大阪大学経済学研究科。E-mail:hge012ns@mail2.econ.osaka-u.ac.jp